

レポート

「SpaceOAR™ プレスセミナー」

- ◆ **タイトル**
前立腺がんに対する最新放射線治療と副作用低減の取り組み
～患者様のQOL向上へ向けて～
- ◆ **日時** 2019年8月28日（水）14:00～15:30
- ◆ **会場** AP東京丸の内 3階 セミナールームB+C
東京都千代田区丸の内1丁目1-3 日本生命丸の内ガーデンタワー3階
- ◆ **登壇者**
 - 東京大学医学部附属病院放射線科 准教授、放射線治療部門長 中川 恵一 先生
 - 「前立腺がん治療」を受けられた患者様
- ◆ **出席メディア**
 - 25媒体 28名



関連記事 掲載一覧 計39件

| No | 掲載日 | カテゴリ | 媒体名 |
|----|------------|-------|-------------------------------------|
| 1 | 2019/8/30 | Web | innnavi net |
| 2 | 2019/9/2 | Web | Rad fan ONLINE |
| 3 | 2019/9/4 | Web | Qlife |
| 4 | 2019/9/4 | 業界紙誌 | 化学工業日報 |
| 5 | 2019/9/11 | 一般紙 | 日本経済新聞 夕刊(東京、大阪、名古屋、福岡) |
| 9 | 2019/9/12 | 産業紙 | 日刊工業新聞 (東京、大阪) |
| 11 | 2019/9/16 | 地方紙 | 福島民報 |
| 12 | 2019/9/20 | 地方紙 | 下野新聞 |
| 13 | 2019/9/20 | 業界紙誌 | 月刊新医療 |
| 14 | 2019/9/21 | Web | 日刊ゲンダイ (ヘルスケア+) |
| 15 | 2019/9/21 | 一般誌 | 日刊ゲンダイ(東京、名古屋、札幌、大阪) |
| 19 | 2019/9/23 | 地方紙 | 山陰中央新報 |
| 20 | 2019/9/25 | 地方紙 | 中国新聞 |
| 21 | 2019/9/25 | 業界紙誌 | INNERVISION |
| 22 | 2019/10/7 | 地方紙 | 伊勢新聞 |
| 23 | 2019/10/7 | 地方紙 | 大分合同新聞 |
| 24 | 2019/10/14 | ラジオ | TBSラジオ『森本毅郎スタンバイ』 |
| 25 | 2019/10/21 | スポーツ紙 | 東京スポーツ新聞、中京スポーツ新聞、大阪スポーツ新聞、九州スポーツ新聞 |
| 29 | 2019/10/28 | スポーツ紙 | 東京スポーツ新聞、中京スポーツ新聞、大阪スポーツ新聞、九州スポーツ新聞 |
| 33 | 2019/11/1 | 業界紙誌 | クリニックマガジン |
| 34 | 2019/11/5 | 一般紙 | 沖縄タイムス |
| 38 | 2019/11/11 | スポーツ紙 | 東京スポーツ新聞、中京スポーツ新聞、大阪スポーツ新聞、九州スポーツ新聞 |
| 39 | 2020/3/5 | 一般紙 | 毎日新聞 朝刊 |

進化する前立腺がんの放射線治療 前編

がんの新常識 名匠に聞く

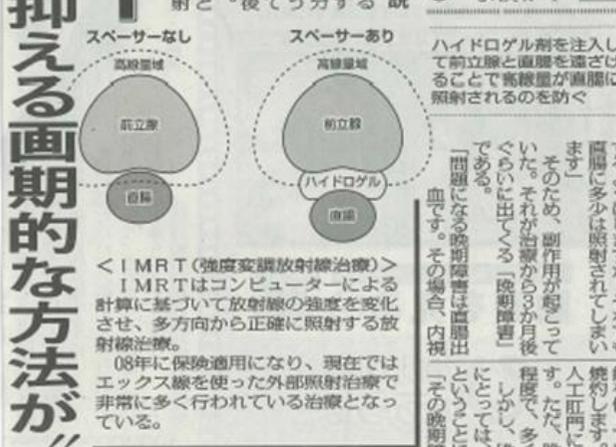
東京大学医学部附属病院放射線治療部門中川恵一 部長が解説



それを実現する
ように、照射する
放射線強度を
布を計算。そう
しないと同じで影響を与えて
しまいます。直腸は前立腺の後
ろに位置しているからです。

前立腺がんの放射線治療にはいくつかの治療法がある。前立腺の中から照射する「密着小線源療法」、粒子線による「重粒子・陽子線治療」などもあるが、より多くの施設で行われているのがIMRT（強度変調放射線治療）である。IMRTについて、東京大学医学部附属病院（東京都文京区放射線治療部門の中川恵一 部長）は次のように話す。

IMRTは放射線の強度を変化させて多方向から放射線を照射しています。最も望ましい放射線の線量分布を与えて



するようになりますが、それでも直腸に多少は照射されてしまいます。そのため、副作用が少なくて済むように、それが治療から3か月後くらいまで出てくる「晩期障害」が多くなります。

「問題になる晩期障害は直腸出血です。その場合、内視鏡を使って出血部をレーザーで焼灼します。重症のケースでは人工肛門になることがあります。ただ、晩期障害は5〜10%程度で、多くはありません。」

しかし、晩期障害が出た患者に対しては、副作用は100%というところになってしまいます。その晩期障害を起さないようにする画期的な方法が、18年6月から保険適用になり、現在ではエクセス線を使った外部照射治療で非常に多く行われている治療となっている。

「私たちが17年9月から行った臨床試験では、米国と同程度の有効性の高い結果が出ました。直腸障害は極めて少なく、性機能も維持できています。ただ、晩期障害が抑えられるだけでは、実は、余りの治療、スペーサーができたことで、IMRTで照射された直腸の回復は、必ずしも回復していません。ですから、必ずしも回復していません。ですから、必ずしも回復していません。」

副作用を抑える画期的な方法がIMRT

副作用を抑える画期的な方法がIMRT

8月末、放射線治療を受けた患者さんと対談する機会がありました。お相手は都内で会社を経営する65歳の男性です。2年前、東大病院で前立腺がんの治療を受けました。放射線を前立腺だけに集中させる「定位照射」という方法で、たった5回の通院で治療は完了しました。1回の照射時間も世界最短レベルのわずか80秒です。従来は週5回、全部で38回の治療でしたから、2カ月もの通院が必要でした。

放射線治療の回数を減らすというには、1回当たりの照射量を増やすことにつながります。しかし、たかさんの放射線量をがんの病巣に照射すれば、周囲の正常な臓器に

がん社会を診る

中川 恵一

イラスト・中村 久美

も放射線が当たってしまうことになりまます。

前立腺がんの場合、前立腺のすぐ後に接している直腸への照射量をいかに減らすかがポイントになります。前立腺がんに対する放射線治療で、直腸の線量を大きく減らすことができる手段が米国で開発されています。我が国でも2018年6月から保険適用され、全国で使用が開始されています。

今回対談した患者さんも、このハイドロゲル剤を使った定位照射を受けました。まわりには、前立腺がんを診断され、手術や従来型の放射線治療を受けた方が何人もいるなか、この治療を受けることができ、本当にラッキーだったと言っていたことができました。

社長業を休むことなく、仕事の合間に治療を受けることができ、すぐに仕事に戻れたこと、治療から9年たった今、再発もなく、毎日元気に生活できていることなどを語っていただきました。治療に携わった医師としても、とてもうれしい言葉でした。

前立腺の他、多くの臓器のガンで放射線治療は手術と同じ位の治癒率をもたらします。しかし、この治療を受ける患者数は欧米の半分程度です。放射線治療の恩恵がもっと広がることを期待しています。（東京大学病院准教授）

放射線治療手術と同じ治癒率

前立腺がん 副作用減少も

放射線治療が進化

ゲルで直腸照射減らす

男性で増加中の前立腺がんの治療は、開腹手術やロボット支援による腹腔鏡手術と並んで、放射線治療も、現在利用できる最良の治療の一つとなっている。放射線の場合、前立腺の裏にある直腸にも放射線が当たり、副作用が出やすかったが、その問題点を克服する新手法が導入された。

東京大病院放射線治療部門長の中川恵一准教授は「前立腺がんの放射線治療は通院で受けられ、高齢者や併発症で手術困難な場合でも治療可能なことが多い」と話す。

ただ、前立腺の真裏に直腸が接しているため、どうしても放射線がかかり、腸内出血などが起きることがあったという。

「これを解決したのが、直腸と前立腺の間にハイドロゲルと呼ばれるゲル状の物質を注入する方法。固まると約1センチの厚さになって直腸を前立腺から遠ざけ、高線量が直腸に当たるのを防ぐ。6月から保険適用された」

局所麻酔で会陰部から注射器のような器具で注入。ゲルは約半年で体内で吸収され、

排出される。

米国の臨床試験では①直腸に当たる線量の低減②直腸の副作用の低減③性機能保持率の向上—という結果が得られている。

東京大病院の臨床試験は40人に実施。39人で成功し、直腸の線量を大きく減らせた。1人はゲル注入が不十分で不成功。中川准教授は「この手法で直腸の副作用を減らせ、より安全で有効な放射線治療ができるようになった。この治療は全国80カ所で受けられる」と話している。

〈2019/9/25 中国新聞（共同通信社配信）〉

— オグメニックス —

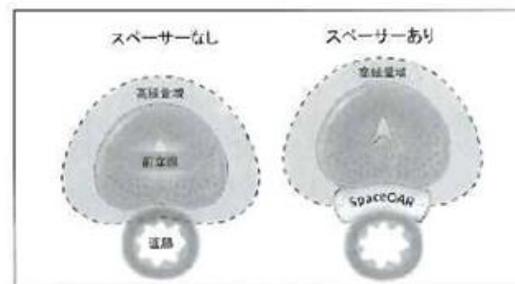
前立腺と直腸間のゲルで放射線治療の安全性高める

オグメニックス社は、8月28日、日本生命丸の内ガーデンタワー（東京・千代田区）にて、プレス向けセミナー「前立腺がんに対する最新放射線治療と副作用低減の取り組み」を開催した。オグメニックス社は前立腺がん放射線療法用のハイドロゲル直腸周囲スペーサー（SpaceOARシステム）を開発・販売を行っている。

本セミナーは、中川恵一氏（東大）の講演と放射線治療を受けた前立腺がん患者との対談で構成。中川氏の講演では、冒頭、「日本は世界一のがん大国でありながら、がん対策後進国でもある。大人へのがん教育が重要」と各種データを示しながら指摘。次いで放射線治療の実施率が欧米の半

分であることを課題とし、「放射線に関わるテクノロジーの進歩、社会の変容によるがんの変化、そして超高齢化と高齢者の就業増加を考えた時、放射線治療は極めて根治治療の手段として重要となる。特に急増している前立腺がんには有効だ。ただし、IMRTにおいても直腸への有害事象はゼロにはならない。対応策として前立腺と直腸の間への“SpaceOARハイドロゲル”の挿入がある。2018年6月に保険適応となったが、東大病院では2017年2月から第Ⅱ相臨床試験を開始し、その有用性を確認している」と述べた。

続いて、東大病院でハイドロゲルを挿入し放射線治療を受けた患者A



氏との対談が行われた。A氏は65歳、2年前に検診で前立腺がんが見つかり、17年11月2日



中川恵一氏

にハイドロゲルを挿入、11月14日～12月4日、外来で40Gyを5回照射（1回の照射は80秒）。副作用も皆無で仕事にも支障がなかったと述べた。ハイドロゲルは、3カ月はスペースを保持し、半年から1年で吸収され体外に排出される。

最後に中川氏は「多くのがんで手術と放射線治療の治癒率は同じだ。患者が望む治療法に迫り着く仕組みを作るしかない」と締めた。

新医療 2019年10月号 (134)

※オグメニックス株式会社は2018年10月にボストン・サイエンティフィック ジャパン株式会社と統合し、2020年1月1日よりボストン・サイエンティフィック ジャパン株式会社がSpaceOARの販売を行う。